

## 文化遺産国際協力コンソーシアム 議事

議題	第1回 東南アジア 分科会	日時	2006/8/3 15:30 - 17:40
参加者 (敬称略)	上野、片桐、坪井、友田、宮崎、大和(分科会)、 花里、小野、是澤、清永、(ジャワ地震被害調査団)、 亀井、勝平、樋口(文化庁)、篠塚、堀田、守山、細川(外務省)、 片山(国際交流基金)、鈴木、井上、永井、稲葉、二神(文化財研究所) 青木、田代、豊島、延近 (事務局)	場所	東京国立博物館 資料館 2F セミナー室1
資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・議事次第</li> <li>・ジャワ中部地震による文化財被害調査報告</li> <li>・企画分科会議事録</li> <li>・町並みワーキング・グループ資料</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入会の案内および入会申込書</li> <li>・文化遺産国際協力コンソーシアム設立趣意書</li> <li>・タンロン遺跡への協力(報告とお伺い)</li> </ul>	<p style="text-align: center;">記録</p> <hr/> <p style="text-align: center;">事務局</p>

## ■ ジャワ中部地震による文化財被害調査報告

報告:

(遺跡の被害状況の説明、構造上の考慮点、過去の修復履歴に関する考慮点など報告。)

今回の調査は、これまで、大和団長はじめ多くの方が長年にわたって築き上げてきたインドネシア政府との友好関係の上に実現したものであるし、外務省や国際協力基金の迅速な支援もあって実現した。改めて関係者各位にお礼を申し上げる。インドネシア政府側としては、花里先生の構造調査について、強い期待を持っていることもあり、今後の展開も、今回行った調査の延長線上に位置づけられると考えている。

インドネシア政府側は日本の援助に対して過度な期待を抱いていない状況なので、日本からの支援というよりは、双方で協力し合って、一緒に修復を進めていく、というかたちになるのではないかと考えている。

QA:

- ・ 石材の接合面をうがってその中にコンクリートを流し込むということだが、石材とコンクリートの接点で破断することはないのか?  
→ 可能性としては、あり得る。  
→ 今回の現地調査でも、ポルトガルセメントで補強された近傍で石の割れが見られる。劣化している石材を使用していることもあるかもしれないが、今後詳細な調査をする必要があるだろう。
- ・ 今回の調査を受けて、今年度も更なる調査や支援などを行う計画があるのか?  
→ 9月までは緊急援助体制の期間でもあり、当面はは支援の段階ではなく、行うとすれば詳細調査。  
インドネシア側は、出来るだけ早い時期の調査を期待しているようだ。

## ■ 町並みワーキング・グループ設置について

討議:

- ・ 町並み保存に関する研究は、トラジャや台湾など、手がけている関係者が日本に多い。  
この集まりは東南アジア分科会だが、その他の地域も含め、この分科会の下にワーキング・グループを置いてもいいと考えている。子細は友田氏に一任したいと思う。
- ・ 具体的には、どのように人を集めて進めていくのか? 日本の町並みをやっているような研究者も入れていくのか?  
→ 麗江やジョグジャカルタなど、科研費のレベルではあるが、様々な町並み保存に関わっている人は多い。  
現段階では国として動いているわけではないので、今後コンソーシアムで扱っていただけたらどうだろう。  
こうした人々をうまく集めて、大きな流れを作っていきたいと考えている。  
ここは国際協力を議論する場なので、国内のサイト如何に関わらず、海外のサイトに携わっている人を念頭に置いている。
- ・ アジアにおいては、日本のように文化財として町並みを保存する、という概念が定着していないため、  
町並み作りは都市計画の一環として取り扱われることが多い。海外での国際協力も都市計画分野からの研究者が多いだろう。  
分野のことはともかく、町並みという切り口は重要なコンセプトだと思う。

決定事項:

- ・ 町並みワーキング・グループのメンバーの集め方や進め方について、次回までに友田氏を中心に事務局で案を作っていく。
- ・ この件については、随時他のメンバーの方々にも支援を頂く。

## ■ タンロン遺跡について

## 報告:

2002年に、タンロンで国会議事堂建設のために工事を行っていたところ、大規模な遺跡が出土し、李朝からレイ朝まで、1000年近くにわたる歴代の宮殿跡の遺構が出土した。

ベトナム政府は、ここを遺跡として保存すると共に、2010年の李朝創建1000年記念の年に世界遺産への登録を目指している。そこで、世界遺産登録のための支援および史跡整備の支援を日本政府に求めてきている。

こうしたベトナム政府の要請を受けて、現在、文化庁、外務省ともに遺跡保存に向けての支援計画を進めている。

(文化庁の計画、これまでの動きと今後の予定説明)

(外務省の動きと入手情報についての説明)

## 討議:

- ・ベトナム政府からのレター文中の仮訳に「ホール」とあるのは、「遺構」のことだと思われる。確認してほしい。
- ・考古遺跡の保存について、当初はベトナム政府は砂をかけての保存に難色を示していたが、ここにきて、日本からのアドバイスをかなり取り入れるようになってきてくれた。現在は、劣化を防ぐことを第一に保存計画が作られつつある。
- ・全体計画を表す用語について。世界遺産委員会では、各種資料の名称の取り扱いについて、標準化をしようという動きがある。従って、世界遺産申請書中での全体計画の名称は、マネージメント・プランという名称を使うべきである。
- ・この計画について、特に異論がなければ文化庁の提出している案に沿って進めたいと考えているが、皆さんの意見はどうか。まだ具体的に参加する研究者は決まっていないが、このプランをたたき台にしてベトナムと協議していきたい。

## 決定事項:

- ・タンロン遺跡保存協力プロジェクトについては、本日示された案で進めていく。

## ■ 今後の分科会の進め方について

## 討議:

- ・定例化はどうするのか？  
→ 事務局としては、定例の場合でも、不定期開催でもいずれにも対応できる。
- ・緊急度の高いものや、期限が決まっているものも多くあるようなので、他の分科会のようなペースでは進めていけないのではないか。
- ・それでは、必要時に随時招集するとして、全員は集まれなくても、議論を重ねていくというスタイルにするのか。
- ・いつも全員が集まれないとなると、分科会の位置づけが解らなくなる。どうしても緊急対応が必要なものがあるのであれば、いっそのこと、ワーキング・グループを作り、後日分科会で事後承認という形もあるのではないか。
- ・しかし、そうすると、ワーキング・グループばかりが増えて、やはり分科会の存在意義が薄れてしまう。  
分科会はしかるべきメンバーの方々をお願いをしているので、このメンバーで集まって議論をするべきではないか。  
事前に議題を明確にして、それに応じて各個人のスケジュールと調整していただくのはどうか。
- ・コンソーシアムの趣旨とも関わってくるのだろうが、そもそも、分科会はどれぐらいの強制力で参加を求められるのか。  
→ 原則として、皆さんに参加を強制するものではない。
- ・コンソーシアムは、公共性が求められているのだろうし、みんなの代表として意志決定をしていくのであれば、責任の所在といった問題も出てくる。だから、一部の人間だけで進めていくとか、曖昧に見える進め方をしてしまうと、参加している他の会員に幻滅されるような残念な結果にもなりかねない。こういう危険を回避するためにも、分科会まで含めた運用のルールを先にきちんと決めておいた方がいいのではないかと。それを事務局で検討してもらいたい。

## 決定事項:

- ・事務局は、分科会に関する規約の充実化をはかる

次回は未定  
(追ってご連絡いたします)